

ICT業界に新たな風を

～ファミリー会論文 募集開始～

FUJITSUファミリー会論文は、自社の取り組みを社外へ発信する場として、また他社の取り組みを知る機会として活用されています。2011年度もみなさまからのご応募をお待ちしております。

チャレンジ精神旺盛な論文を期待

論文委員長 竹中正彦氏 ●古河スカイ株式会社



FUJITSUファミリー会の論文募集には、毎年、数多くの作品が寄せられています。日々の業務をこなしながら、論文をまとめあげるのには、たいへんな労力が必要かもしれません。しかし企業の一線で活躍される皆さんにとって、これまでの仕事を通して築き上げてきた成果を外の世界に問う貴重な場となり、また自分たちの取り組みのプロセスを改めて見直すいい機会ともなるのではないのでしょうか。付け加えれば、システムの構築やプロジェクトの遂行という作業自体が、他者の要望や意見を調整したり、いろいろな考え方を取り込みながら、段取りを組んで遂行し、完成までに辿り着かせること。論文においてもさまざまな材料を整理して、自分の頭の中でシナリオを描き、ときには行きつ戻りつしながら書き進め、きちんと完結させる作業が必要で、そこには共通する部分が多くあるのです。また外部の人たちに自分の仕事を伝えるための工夫や努力を重ねるというのも、ビジネスに求められる能力のひとつ。論文への取り組みを、日常の業務ではなかなか得られない貴重な勉強の機会と捉え、ぜひ多くの方に挑戦していただきたいと考えています。

また審査委員としての視点から申しますと、技術論文的な傾向を持つファミリー会の論文では、技術的にすばらしい取り組みや、新しいチャレンジをテーマに、その成果を論じているものが多く、それがひとつのこの業界の動向を示唆するものであると感じています。同時に、日々課題に向かって一生懸命に取り組んでいることがひしひしと伝わってくる内容のものもあり、何を課題として、どのような角度から問題に取り組んで、解決に導いたか、その過程がストレートに伝わり、業務に対する熱意が伝わる、そんな論文にも触れ合えます。

他社はこんな取り組みをしているのか、こんな問題の解決方法があるのかなどと、読み手側にも発見や感動を与えてくれるのも魅力です。今後もファミリー会の論文をこのような刺激ある場として、会員の皆様に支えていってほしいというのがわれわれの思いです。



2011年度 論文・募集中! ～業務の成果を社外にアピールしてみませんか?～

ファミリー会では全国活動の一環として、情報通信システムに関する事例、問題提起、将来動向などをテーマにした「論文」の募集を年1回行っています。日ごろの業務の成果やアイデアなどを論文としてまとめてみませんか?みなさまからの多数のご応募をお待ちしております。

- 応募締切日: 2011年9月30日(金)
- 原稿締切日: 2011年10月20日(木)
- 賞金: 優秀論文 50万円
秀作論文 25万円
奨励論文 10万円 他

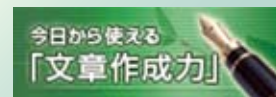
詳しくは<論文サイト>▶ <http://jp.fujitsu.com/family/article/>

主な掲載内容

- ・ 2010年度入賞論文 ・「執筆の手引き」
- ・ 「論文の書き方マニュアル/投稿論文、ここが“急所”」



掲載論文をご覧いただくにはIDとパスワードが必要です。



<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/back/>

2010年度 秀作論文 受賞者の声

失敗も含め読み手に役立つ情報を意識

●宝ネットワークシステム株式会社

少人数ではじめた ITサービスのクオリティ向上 ～なぜ成功と失敗に分かれたのか～



左から 三田 直樹 氏
宮崎 智子 氏
坂東 徹 氏 (現在は関係会社に在籍)

当社では2010年、組織変更があり、新たに企画グループが発足しました。この部署の役割のひとつが、さまざまな形で私たちの業務を内外にアピールしていくこと。外部の論文に応募したのも、その活動の一環です。上司からは、視野が広がり学べることも多くあると励まされました。

論文を作成するにあたって私たちがこれまで携わってきた業務から、3名がチームとしてタッグを組むことでより内容が深まるテーマを模索しました。宝酒造など宝グループの情報システム機能を担っている当社では、約5年間で宝グループの内部統制と大規模パソコンリプレースへの対応を行いました。そこでICTサービスのクオリティの向上を目的に取り組んできた内容を論文という形にまとめることにしました。

論文を書く上で意識したのは、他社の方々に読んでいただいたときに、何かしら有益な情報が提供できていること。今回の取り組みは少人数で手がけてきたもので、限られた人員でもさまざまな工夫を凝らした活動方法があるということ、論文を通して伝えたいと思いました。また、これまでの業務を成功、失敗も含めて振り返ったことで、さまざまな気づきもありました。その情報を社内にも提示することで、改善に向けての意識が会社全体に広がったことも予想外の成果でした。

業務は社員たちの努力や協働によって成果を挙げていきますが、論文もまた同様です。チームワークで奮闘し、ひとつの形を作り上げる達成感を味わうことができました。さらに秀作論文として評価していただいたことが確かな自信にもなり、今後の業務にもつながっていく成果であると感じています。

内外からの評価は企業人としての喜び

●パナソニック電工インフォメーションシステムズ株式会社

基幹業務向け WEB基盤の構築 ～「オープンFEP」によるAPサーバ統合～



左から 山神 修 氏
黒田 尚志 氏
甲谷 龍二 氏

メインフレームで稼働する大規模な基幹システムをオープン化するために。今回の論文は、自社開発したサーバ「オープンFEP」の配下に、すべてのWEBサーバ、アプリケーションサーバを配置するシステム構成をもつWEB基盤を構築するまでの経緯とその機能、効果を論じました。これは当社における約10年間にわたる取り組みをまとめたものです。

論文の執筆は、他社にはない独自の技術を広く社会に訴求する使命と共に、われわれが開発・構築した技術を客観的に捉えてドキュメントとして残すという社内的な役割も担っていると考えています。われわれの取り組みは技術的にも高度なもので、独自性もあり、それを正確に伝えることができれば、評価していただけるのではという思いがありました。

むしろ今回の論文応募に際して課題となったのは、技術者としての言葉ではなく、一般の方たちにも理解していただける内容と文章でまとめあげること。書くからにはどう納得させられるかに強くこだわりを持ちました。そのため技術的な説明や経過などの論文としての基本的な部分を踏まえつつも、さまざまなトラブルに見舞われた際の戸惑いなど、実際の現場の空気が伝わるような、読み手を意識した表現にも工夫をしました。

今回、賞をいただくことができ、われわれの技術が一般社会に受け入れられたと実感しています。これは企業で働く者にとっての大きな誇りです。また外部から高い評価を得られたことで、社内においてもわれわれの取り組みへの再認識につながり、長年にわたる努力の結実と、その手ごたえにも喜びを新たにしています。

2010年度奨励論文

「大規模基幹システム開発の“リスク”をどう乗り越えたか ～Topjax (フレームワーク)/Oh-Pa 1/3(オンメモリDB)の圧倒的な有効性～

●株式会社富士通ビー・エス・シー